



木下誠一編著

『雪と氷のはなし』

技報堂出版、1988年

B 6 版 261頁 1,400円

1988年は、南極昭和基地開設30周年、初の女性隊員、昭和基地への空路開拓成功と南極観測に従事した者にとっては心躍るニュースで始まった。たまさかのテレビによる南極の風景は、鮮やかな青空、まさに抜ける様な青空のもと、ペンギンが遊び、氷山がゆったりと映えるという、雪や氷のけがれなさを強く印象付けるものばかりであった。

このような時に、日本における雪氷研究の先駆けである北大低温研のメンバーによる『雪と氷の話』が、技報堂のはなしシリーズの一つとして出版された。

日本は世界でも有数の多雪国であるが、幸か不幸か、首都東京を含む関東一円では、冬型気圧配置が強まれば強まるほど、それはまさに例外的な晴れの天気が続ぎ、雪とのつきあい方をいつまで経っても覚えられない。否、むしろ雪のことをすっかり忘れてしまうことさえある。しかし、日本の大部分の地域では、冬季には、雪に克ち、雪を利し、雪と遊ぶことを、日常の課題として永年取り組んできたのである。

また雪は日本のエネルギー源のひとつとして重要であり、政策立案に携わる立場の人々には、雪の功罪を十分に理解してもらうことが必要と考えている。

さて本書は、関東地方に長く暮らし、雪とのつき合い方をすっかり忘れてしまった筆者にも、久々に雪の感触

を思い起こさせてくれた。

降雪(4, 5, 6章)、積雪(8, 9, 10, 11章)、なだれ(14, 15章)、ふぶき(16, 17章)など、そして流水や着氷、着雪(25~29章)の各章では、雪や氷の一般的な性質、日常感じることでできる性質に触れており、また除雪や雪下ろし(20, 21章)、交通に及ぼす影響(19章)、凍上対策(22, 23章)などの各章では生活上の知恵にも言及している。そして結晶としての振舞い(7, 18章)は興味ある部分であった。最後に利雪時代への提言として人工凍土について(30, 31章)触れているがこれに人工氷河計画も含めると、いよいよ夢は広がる。

ところで、本書は執筆者の多くが北大の関係者で占められている関係からか、北海道の雪や氷に力点が置かれていたように思う。それ自体どうということではないが、北陸の雪についての記述も欲しかった。それほど、同じ雪でも性質が異なり、人間生活に及ぼす影響が違うと思うからである。

手軽に読める本書ではあるが巻末に各章毎の文献を載せ、読者の便を図っている。文献は、研究者対象のものと啓蒙書が混在しており、一般の読者には入手しにくいものもあるように感じた。裏を返せばそれほどこの分野の啓蒙書が少ないことの故か。

巻頭のカラー写真による雪と氷の生態(蔵王モンスターと屈斜路湖の御神渡り)も美しいが、雪氷試料の偏光顕微鏡写真の一つもカラーで欲しかった。それは数十年前の北海道新聞に載った同様の写真に深く魅せられた筆者の独断の思い入れからである。

(気象庁予報課 安富裕二)

日本気象学会秋季大会シンポジウム開催のお知らせ

テーマ：雲と放射

座長：松野 太郎(東大・理)

- ① 雲の放射特性……………田中 正之(東北大・理)
- ② GCMにおける雲の取り扱い
……………時岡 達志(気研)
- ③ 雲の維持と降水のメカニズム
……………高橋 劭(九大・理)

趣旨：「雲と放射」の問題は WCRP などの気候変動研究の中心課題の一つとなっている。今、なぜ「雲と放射」なのか、何が難しいのか、どのようなアプローチが試みられているのか、「雲と放射」研究の現状と問題点を明らかにし、今後どう進むべきか方向をさぐる。